

今西錦司文庫の分析

橋本 友貴

今西錦司（1902-1992）は進化論者として有名な研究者である。カゲロウの幼虫の観察から「棲みわけ」理論、「種社会」理論、内モンゴルの調査からは「遊牧論」とフィールドワークでの発見から構築した理論を展開した。晩年には、学問が細分化され全体性が失われつつあることを批判し、学問の統合を目指す「自然学」を提唱した。

今西についての従来の研究には、今西は自然科学者であったが、自身の専門分野の本だけでなく、哲学や社会科学の本を広く読む知識人であり、今西の著書には西田哲学の影響がみられるという記述があり、今西が幅広い分野の本を読み、自身の研究に活かしていたことがうかがえる。今西は旧制第三高等学校（三高）を卒業しているが、当時の三高は、教養主義が中心的文化であった。今西は教養主義が広がった旧制高校で高校時代を過ごすことで、教養主義的な読書をするようになったと考えられる。

本研究では、岐阜大学附属図書館所蔵の今西錦司文庫を分析し、今西がどのような読書をしていたかを明らかにすることを目的とする。今西錦司文庫を、今西および教養主義に関する文献を参考にしながら、出版年、分類記号、分類記号別経年変化、著者の4つの項目で分析する。

分析から、基本的には今西がその時期に研究をしている対象、地域に関する本が多いが、自然科学的な研究を行っていた時期から社会科学分野にも興味を持っていたこと、さらに自然科学分野の中でも、昆虫の研究を行っていた時期から哺乳類の本が見られることから、自身の研究対象だけでなく動物全体に興味を持っていたことがわかった。また、今西が多くの本を所有した著者は、大多数が友人、弟子など面識がある者で、彼らの本の中には著者署名本も多くみられた。これらの所蔵状況の分析から、今西は、自身の研究領域である生態学、霊長類学の研究者だけでなく、社会学者、民俗学者、哲学者など幅広い分野の研究者と晩年まで交流が続いていたことがわかった。また、先行研究で今西が影響を受けていたという記述がみられた西田の著書も数は多くないが見受けられた。

自然科学者であった今西が、哲学書を熱心に読むなど幅広い読書をするようになったことについて、学生時代に旧制高校に広がっていた教養主義が時代背景として指摘できる。自身の研究領域と関係のない学術書を読むことが、今西個人の資質によるものなのか、教養主義の影響によるものなのかを判別することはできないが、教養主義時代の旧制高校で学生時代を過ごした自然科学者が幅広い分野の本を読んでいたことは、蔵書の面から明らかにすることができた。

（指導教員 原 淳之）